

No.104 会社訪問

株式会社柴山科学器械製作所

代表取締役社長 柴山 幸雄 氏



会社プロフィール

代表者：代表取締役社長 柴山幸雄

所在地：〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-11-8

TEL：03-3987-4151 FAX：03-3987-4155

創立：昭和36年（株式会社として）

資本金：5,200万円

事業内容：高分子の粘度・密度・比重等を測定する装置の受注生産と販売、高分子の粘度と密度の測定方法（情報）の提供、受注生産品の国内販売と輸出、ワシントン条約・毒物・劇物等の輸出入許可手続きを伴う貿易とそのアドバイス

URL：<http://www.shibayama.co.jp>

聞き手：南 明則（広報副委員長）岡田康弘（専務局長）取材・撮影・編集：クリエイティブ・レイ株

“高分子の粘度&密度”の測定装置と 貿易業務で顧客の要望にこまやかに対応

— まずは御社の主な事業内容や主力製品をお教えいただけますでしょうか。

弊社は高分子の物性、中でも粘度と密度を測る装置に特化した製品づくりを行っています。弊社のWeb上には、製品として自動粘度測定装置と比重測定装置を掲載していますが、受注生産を基本としています。

PET・PP・PE・PVC など高分子を使った製品は製造するメーカーによってそれぞれ特徴があり、作り方が違います。そのため、高分子を計測する粘度計や密度計もお客さまごとに仕様が異なります。そこで、弊社では注文をいただいたお客さまそれぞれに合わせた製品づくりを行っています。

— 受注した装置は、製造まですべて御社で行っているのでしょうか。

装置の仕様書から設計までは弊社で作りますが、製造は信頼する優秀な業者をお願いしています。最終の装置の組み立てとテストは弊社で行い、お客さまへ納品しています。

弊社についてお話しするとき、コンパクトに説明するのが難しいため、お客さまにはメーカーとお伝えしています。また、弊社の最も重要な仕事は、「情報をアレンジすること」だと考えています。

— 御社の高分子測定装置の特長を具体的にご説明いただけますか。

粘度計の多くは石油を計測するために作られていますが、石油の計測と高分子の計測では求められる精密さが大きく異なります。また、測定行程も異なります。1つのサンプルの粘度を測るとき、石油であれば10分ほどで計測できます。それに対し、弊社の自動粘度計測装置は30分かかって計測を行います。

計測の手順として、まず自動で粘度管内部を綺麗にしてから計測に入ります。温度に関しては100分の1の精度を保つよう温度を安定させ、そのあと、光センサーで流下秒数を3回測ります。その3回の誤差が0.03秒以下であれば合格とし、その平均値を出しています。



自動粘度測定装置(左)、二軸延伸装置(中央)、比重測定装置(右)

ここまでこだわる製品は他に類はなく、高分子の粘度計測に関しては世界一を誇る装置であると自負しています。

— 柴山社長は、お父さまの事業を継がれたとお聞きしましたが、これまでの御社の歩みを簡単にお聞かせいただけますか。

弊社はもともと私の祖父が島津製作所から独立し、柴山製作所として理科学機器を作っていました。創業はおそらく明治の頃だと思います。第二次世界大戦の頃には、海軍の指定工場になっていたという話を父からは聞いています。

そして、戦後に文京区本駒込で仕事を再開しました。当初はガラス製品をいろいろ作っていましたが、次第に粘度計や密度計に特化するようになりました。

昭和30年代に入ると日本では高度経済成長が始まり、プラスチックや化学繊維などを作る会社も増え、企業間の競争も激しくなりました。そのため、よい製品を作りたい、よい研究開発をしたいという要望が高まるにつれ、高精度の粘度計が求められるようになったのだと思います。

日本の場合、厳しい目を持ったお客さまは「先生」です。その「先生」に鍛えられることで、世界に誇れるものづくりに結びついていったのだと思います。

— 柴山社長が会社を継がれたのは、おいくつのおきだったのでしょうか。

私が28歳のとき、父の体にがんが見つかりました。父はそれまで私に会社を継いでほしいと言ったことは

なかったのですが、父の病気を機に当時勤めていた会社を退社し、この仕事を継ぐことを決意しました。

父のがんは早期の段階だったのですが、最終的には肝臓の合併症で亡くなりました。父を診察していた医師の話では、父は戦後、腎臓の手術を受けており、そのとき輸血などでC型肝炎に感染し、それが合併症を引き起こしたのではないかと、ということでした。結局、私が父と仕事をしたのは半年ほどでした。

弊社の仕事は装置を製造することから「情報をアレンジすること」だと考えるようになり、輸出の仕事に軌道に乗せることができたことで、やっと柴山科学器械製作所を自分の会社と言えるようになった気がしました。そう思えるようになったのは父が亡くなって、10年くらい経ってからのことでした。

— 柴山社長はゼネラルサイエンスコーポレーションという会社の社長でもあり、また名刺にはジェットロ認定貿易アドバイザーという肩書きもありますが、どのような事業内容なのか教えていただけますでしょうか。

高分子の測定と並ぶ、弊社のもう1つのキーワードが「貿易」です。

父から会社を継ぎ、ようやく自分の会社と思えるようになった頃、世界に比べ日本には博物館が少ないという議論が起こり、政府が各地方自治体ごとに博物館を作ろうという話が持ち上がりました。

子どもの頃から貿易に関心がありましたし、自然史関係も嫌いではなかったため、その仕事をやってみようと思うようになりました。

ただ、柴山科学器械製作所が扱う製品とは異なる分野ということもあり、ゼネラルサイエンスコーポレーションという会社を新たに設立して、輸入したものを国内で販売することにしました。

そこから広がって、ゼネラルサイエンスコーポレーションでは、国内外のポリマー試料や標準物質、医学・歯学用の解剖学標本や模型、化石・化石人類・動物・隕石・恐竜のグッズ、ワシントン条約・毒物・劇物などの輸入許可手続きを伴うもの、そしてお客さまが必要とされる商品等の輸出入や情報の提供などを行っています。

— ワシントン条約で禁止されているものでも輸出入が可能なのですね。

ワシントン条約では輸出入が禁止されているものであっても、輸出入が認められる場合があるという例外が明文化されています。その例外に当てはまりさえすれば、輸出入は可能なのです。

現在はテロの予防の影響もあり、中止していますが、以前は核燃料物質や放射性物質なども扱っていました。空気中に浮遊しているプルトニウムを測定するとき、測定する機器の精度を確認するため、放射性物質を標準試料として使いたいといった要望があります。海外にはそういう試料を作っているところがありますが、そういった試料は小さく、値段も数百ドルほどで、日本の大手商社ではそんなものは扱っていません。そこで私たちはニーズのあるお客さまに対し、どんな書類が必要になるか、どうやって輸入すればよいかなど、アドバイスや情報の提供も行っています。

— 柴山社長は、子どもの頃から貿易に関心があったというお話ですが、何かきっかけがあったのでしょうか。

戦前の話になりますが、私の叔父が海外から剥製を輸入していました。また、父の書斎にはタイプライターが置いてありまして、父も貿易には興味を持っていたようでした。そのタイプライターを使って、叔父は海外へ手紙を出し、貿易の交渉をしていたようです。

そうした光景を見ていて、子供心に私も貿易という仕事は面白そうだと思っていました。やがて父の会社を継いで、私自身も海外との仕事を始めることになるわけですが、そこに父や叔父とのつながりを感じることがあります。

— 御社では高分子の分析試料の輸入もされているようですね。

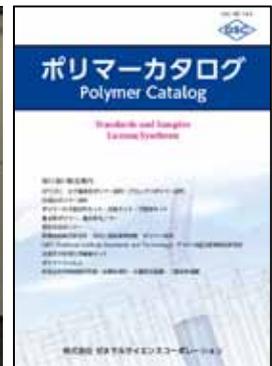
分析試料を数グラム、日本で特別に作ろうとすれば大変なコストがかかってしまいますが、海外にはヨーロッパとアメリカに試料を作っている会社があります。日本のある研究者に、その会社から分析試料を購入してほしいと依頼されたことがきっかけで、弊社はそのアメリカの会社の日本総代理店となりました。

今はネットを使って、研究者が海外から試料を輸入することが可能ですが、購入した試料が通関できないという事態も起こり得ます。その点、弊社ではさまざまな知識と経験から研究・学術目的以外では輸入できないもの、通関の困難なものなどの輸入のお手伝いをすることができるのです。

ロシアで発掘された白亜紀後期のアンモナイトの化石↓



↑ 全長約10メートルの大型肉食恐竜スピノサウサウスの骨格標本



ゼネラルサイエンスコーポレーションが扱う高分子標準試料が記載されたカタログ

— 現在、御社が課題として取り組んでいることがありましたら、お聞かせください。

課題というよりも、このままではガラス職人（製造業者）が日本からいなくなってしまうのでは、という懸念を抱いています。

昨年のですが、30年以上付き合いきたガラス職人（業者）が、倒産せざるを得ないと言ってきました。ガラス職人として非常に優秀であり、彼がいないと困るということもあり、弊社の顧問弁護士に相談してみました。そこで倒産ではなく、その会社を閉じることにして、ガラス職人である彼には弊社の契約社員として仕事をしてもらうことにしました。

海外から安いガラス製品が入ってきたり、後継者がいなかったり、今日の国内のガラス業者は窮地に立たされています。規格品ならば輸入でもよいでしょうが、受注生産で、精度の高い製品が求められるような場合は、優秀な職人の技術が絶対に必要になります。国内の優秀な業者がいなくなってしまうのは、業界にとって憂慮すべき状況です。こうしたことを政府や業界にも検討していただき、なんとか改善策を打ち出せないものかと頭を悩ませているところです。

それと、困ったこととして敢えて挙げるとすれば、装置がなかなか壊れてくれないことでしょうか。優秀な企業ほど機器を大切に扱うためか、ある大手企業では弊社の装置を30年以上使っていただいています。

パソコンが導入されるようになり、そのパソコンが旧式になったためシステムコントローラーを交換するといった需要はありますが、装置本体はまだまだ使い続けるというお客さまが多いようです。

— 話題は変わりますが、柴山社長の趣味、あるいは休日に楽しんでいることがあればお聞かせください。

私の最大の趣味はクラシック音楽を聴くことです。父も趣味人だったせいか、中学生の頃、大型のスピーカーが欲しいと言うと、何も言わずに買ってくれました。実は当時、姉がピアノを習っていて、私もやりたかったのですが反対されてしまいました。それで、オーディオならいいと、父は高価なオーディオ機器を買い与え

てくれました。

それ以来、私はクラシック音楽にのめり込んでいき、今では20畳の書斎に防音設備を付け、土曜と日曜の午前中は部屋に閉じこもって、音楽漬けの休日を過ごしています。

もうひとつの趣味は読書です。傾向としては芥川賞より直木賞受賞作品の方が好みで、1つの作品が面白いと、その作家の全作品を読破してしまうこともよくあります。

— スポーツなどの趣味はございますか。

自転車にはよく乗っています。クロスバイクとマウンテンバイクを持っているのですが、平日は自転車で本駒込の自宅から会社まで通っています。日曜の午後は自転車で遠出をするように心がけています。

また、学生時代に剣道をやっていたこともあり、毎朝、木刀で素振りをしたり、ストレッチとダンベルで体を動かしたりしています。

30代の頃はヨーロッパやアメリカへ行くと、疲労感をおぼえることがありましたが、今思えば、その頃の疲れなど疲れのうちに入らないものだったのかもしれませんが。最近では台湾への出張でさえ疲れを感じてしまいます。

それでも、疲れたからと言って仕事に支障をきたすわけにはいきません。疲れたから今日は休むというのは悔しいので、体力づくりに励み、70歳までは今のようには仕事をし、車も運転し、自転車にも乗り続けたいと思っています。

— リラックスしたり、疲れを癒したいとき、何かされていることはございますか。

タイの友人からタイ式マッサージを紹介されて以来、土曜の午後は、そのマッサージを4～5時間受けています。マッサージをしてくれる人に言わせると、私の背中では1週間でカチカチになってしまうとのことでした。今ではこのマッサージをやってもらわないと、疲れが抜けなくなり、私にとって1週間に1度の欠かせないメンテナンスになっています。